

今日はちょっと興味深いお話しをしましょう。千利休さんのお話しです。ところでみんな、千利休さんって知ってる？

2. あのね、時々「一休さん」と間違う人がいるんだけどね、それは違いますよ。一休さんも有名な人ですけどもね、一休さんはお寺のお坊さんです。千利休さんは、お坊さんじゃありません。
3. 千利休さんは、茶道を極めたことで有名な人で、今から500年くらい前の人です。「せんりきゅう」と言う場合もあれば、「せんりのきゅう」という場合もあります。
今でも茶道を教えている人、習っている人たちは、大勢いますね。みんなの中にもいるかな？ 大人の人たちの中には、きつというと思うよ。そのお茶をする世界の中で、一番有名な人が千利休さんじゃないかな。
4. お茶っていうのはね、こういう「茶室(ちゃしつ)」と呼ばれるお部屋の中で行なわれたりします。
これはとっても立派な茶室ですね。
5. 利休さんの時代、最も偉いお殿様は、豊臣秀吉という人でした。秀吉はお猿さんみたいな顔をしていたそうですよ。
っていうか、これじゃ完全にサルですけども・・・。

「おい利休、わしに茶室をつくってくれ。そこでわしに最高の茶を入れるのじゃ。良いな、最高の茶室じゃぞ！」

6. 「いや～、かの有名な千利休がつくる茶室じゃ。どんなものになるか、楽しみじゃのお～。うきやきやきやあ。
わしは日本で一番エライ殿様じゃからのお。わしにふさわしい、お城のような茶室になるのかのお～。」
7. 「ちょっと変わった茶室になるかも知れんのお。良い良い。豪華^{ごうかけんらん}絢爛であれば良いのじゃ。うきやきやきや、早く出来上がらないかのお。楽しみじゃ、楽しみじゃ！」
8. ところが出来上がった茶室を見てビックリ仰天！ すごく小さな小さな茶室だったのです。中は二畳のスペースがあるだけ。二畳って、畳が二枚だけってことだよ。畳が二枚っていうのはあまりピンと来ないかな、人が二人しか入れない、それだけ狭いってということなんだ。
9. しかももっと驚いたのは、入り口がすごく小さいということなんです。普通の大人は、立ったままではもちろん入れません。ひざまずいて、頭を下げて、手をついて、小さくなって入らないといけないんです。
10. お侍さんはみんな刀ややりを持っていたわけだけど、そんなものを持ったままでは、もちろん入ることなど出来ません。刀もやりも外に置いて、邪魔になるヨロイやカブトも全部とって、ひざまずいて、頭を下げて、手をついて、小さくなって入るんです。
たとえそれがエライお殿様であったとしても、そうしなければ茶室の中には入れません。利休さんは、わざとこういう茶室をつくったのでした。

どうしてこんな茶室をつくったのかな～？

11. 実はね、千利休さんの奥さん「おりき」さんは、キリシタン(クリスチャン)でした。だから利休さんは、いつも奥さんからイエス様のこと、天国のお話しを聞いていたんだね。礼拝に行ったことだってあるんだよ。
こうして利休さんは「茶室を天国のような場所にしたい。だから狭い入り口にしよう！」って思いついたんだって！

「狭い門を通らなければ、天国に入れませんが。」 マタイ 7：13

ヨロイやカブトを着けていたり、刀ややりを持ったままでは、茶室の中には入れません。同じように、どんなにお金を持っていたり、どんなに有名になっても、どんなに偉くなっても、だからといって天国に入れるわけではありません。

イエス様を信じて、神様の前にへりくだる人が、天国に入ることができるんですね。

今日は、ちょっと興味深いお話しをしました。 おしまい。